

Lady Chatterley's Lover: コンスタンスの再生

Lady Chatterley's Lover: Constance's Rebirth

内藤 歆修

Kanshu NAITO

要 旨

D. H. ロレンスは、処女作 *The White Peacock* から最後の長編小説である *Lady Chatterley's Lover* まです、自分の思想や生き方の模索を、その時点ごとに表明してきた。生活の中で遭遇する問題点と解決方法を小説の主人公に託し描いたのである。命の期限を切られた作者が、猥褻という誹りを恐れず、敢えて性を通して人間として満足のいく生を全うする姿を示した本作品において彼の理想とする生と性の関係を考察する。

はじめに

メキシコのオアハカに滞在していた 1925 年 1 月末、D. H. ロレンスは兵士たちが町に持ち込んできたマラリアに感染し、3 月 6 日には結核の第 3 期という宣告を受けた⁽¹⁾。この宣告以後、何にも増して生と死に対する強い関心と、人間はいかに生きるべきかという問題について強烈なこだわりを示すこととなった。元来、ロレンスは自分の生き方や信念を小説にして表してきたが、生死のぎりぎりの立場に追い込まれた今、揺るぎの無い生きる指針が必要であった。人生の最後の時期に彼が到達した生きる拠り所がこの *Lady Chatterley's Lover* であった。

I Constance と Clifford の空虚な生活

本作品は現代文化を代表する 2 人の結婚から始まる。その冒頭の部分は何時になくロレンスとしては思弁的な文章となっている。

Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. ... We've got to live, no matter how many skies have fallen. (第 1 章)⁽²⁾

この言葉に血肉を与えたのが本作品であると言える。全体で 19 章から成り立っている。最初の第 1 章から第 4 章までで、現代人の精神生活が肉体生活をいかに蝕み、それ自体もいかに虚しいものであるかを象徴的、視覚的描写と討論を多用することで描写している。物語自体も引き締まっていて、読者の感情と理性に充分訴え得るものと言える。ここでロレンスは、今までもよく用いてきた 2 元論で、人間の生活を精神生活と肉体生活に分けて、物語を進める⁽³⁾。

主人公 Constance (Connie) Reid は王立美術院会員で自由主義的な思想の持ち主 Sir Malcolm を父に、教養ある女性を母に生まれ、知的な上流家庭に育った。赤ら顔で、柔い茶色の毛髪をして、眼は大きく、声はやさしかった。外見は素朴で、頑丈な肉体と人並み以上の精力を備え、動作の遅い、スコットランドの田舎娘に見えた。若い頃からヨーロッパ大陸に渡り、2 歳年長の姉 Hilda と自由な生活を享受した。18 歳の頃には、かりそめの恋愛を覚え、性の衝動に駆られたドイツ人の青年に消極的に身体を開いて、性の体験を持ったが、青年は戦死した。Constance は、性の快感に圧倒されそうであったが直ぐに自分を取り戻し、自分の自由を失うことはなかった。性は大して重要性を持たなかったのである。父は殊に、Constance の性格が気に入っていた。父の生活振りとその寛容さは娘達に少なからず影響を与えた。Constance はヨーロッパ大陸で自由な空気を吸い、未熟ながら性的経験をしたとは言え、それらは自己の意志を持った積極的、自覚的な行動とは言えなかった。第一次大戦が始まったため帰国していた彼女は、ケンブリッジ大学出身でボン大学に学び、やはり帰国していた Clifford Chatterley 中尉と付き合った。

Clifford は准男爵の令息であり社交人であるのに、田舎びた臆病な一面があった。限られた上流社会、地主貴族の社会では落ち着き払っているが、外の巨大な社会に入ると、内気な、無気力な人間になってしまう。彼にとって Constance の一風変わった穏やかな確信を身に付けた態度は魅力的であった。彼女は混沌とした外部の世界で、自己を失うことが少なかった。

兄が戦死し、Clifford は嗣子となった。出征した翌年、1 ヶ月の休暇を得て帰還したとき、Constance と結婚した。蜜月の後、激戦地へ戻って行った。6 ヶ月後、粉々の状態で本国へ送還された。彼は 29 歳で、妻は 6 つ年下の 23 歳であった。彼は 2 年間の闘病生活の後、下半身が永久麻痺となり、性的に不能となった⁽⁴⁾。彼の下半身不随という事実は夫婦の間に肉体的な接触は勿論、どのような意味においても真のコミュニケーションは成立しないことの象徴となる。当初、Constance は性というものは原始的で無様な動物的本能の名残りに過ぎないと考え、Clifford の知的で精神的な親密な交流の内に生きて行けると思っていた。それまでの性的経験は彼女に何の本質的影響も与えていなかった。Clifford の下半身不随は残酷ではあるが、彼の血の通わぬ精神生活を直接視覚に訴え、最も明示的である。

Clifford は Chatterley 家を継ぎ、Constance とラグビー邸で生活を始めた。彼は車椅子生活を余儀なくされたことで、極端に内気で自意識過剰となり、妻と召使い以外には人に会うのを嫌がったが、服装には気を遣い、贅沢な注文支立ての服を着てボンド街の高級店で求めたネクタイを絞っていた。一

方、しばしば現れる高慢な態度と、不安と確信が交錯する目付きは彼の本性を現わしていた。彼は坑夫たちを人間というよりは物として、炭坑の一部として見下していた。2人は夫婦円満に過ごしてはいたが、外の社会であるテヴァーシヤル村からは完全に隔絶されていた。Cliffordは歩行不可能だが、敷地内であればエンジン付きの車椅子で自由に動き回することは出来た。

Cliffordは頭脳は依然として明晰であったので、次第に小説を書くことに興味を抱くようになった。現代人の空虚な心理を器用に分析した皮肉な作品は時代の嗜好に合い、名声と年に1,200ポンドの収入を得た。妻はその間、積極的に彼の知的活動に参加し支援し続けた。だが、全く互いに触れ合うところがなく、夫婦を支えるものは一種の半ば自足した精神の親密さだけであった。しかし、この夫婦間において、徐々に軋みが潜在的に生じつつあった。夫の世話と肉体生活の欠如のため、Constanceは次第に容色が衰え、心も寄り所を失っていく。性的関係を否定するか単なる快樂の手段としか見なさない精神性が、ラグビー邸を覆い、精神生活の虚しさのせいで彼女は心身共に衰えが目立ってくる。一方、Cliffordは創作活動によって金と成功を得て、自分の精神的存在の根拠をそこに求め、外見的には成功した。

有名人となって、ラグビー邸に多くの文化人を招き、Chatterley夫妻の生活は表面的には平穏で幸福に見えた。こんな時、Constanceの父親はCliffordの小説世界について、“it’s smart, but there’s nothing in it. It won’t last!”(第2章)と批判する。社会的にも成功し、人生を楽しみ、その生涯を見事に乗り切ってきた父は、ラグビー邸に移ってきて2年目になり、段々精彩を欠き、痩せていく娘が、demi-vierge(半処女)のような生活をしているのを心配し、注意を喚起する。しかし、この忠告に対して娘の反応は鈍く、一方Cliffordは気色ばむ。

父のこの警告は正鵠を得た指摘で後のConstanceの行動の原因を予示している。彼女は精神も肉体も同程度に重要であることを未だ認識しておらず、精神の肉体に対する優位性を信じていたため、Cliffordの創作に協力することに生活の意味を見出そうとしていたが、現実には、益々実質的な世界との接触を失ってゆく。こんな状態に追い込まれている娘に敢えて、父親は愛人を持つと勧める。娘の生活は精神的な繋がりはあるが、肉体の結び付きのないことを父も承知していた。それが経験の豊富な父からみれば、堪え難いことであったのである。

この不毛な精神生活はCliffordの作家としての名声が上るに従って、Constanceにとり空虚なものになっていき、次第に彼女の精神状態を不安定にしていった。更には、肉体的な衰弱の兆しをも見せるようになった。Cliffordは文学的成功を求めるのに役立ちそうな作家や批評家を次々とラグビー邸に集めていた。彼等は社会のエリートとして、性や結婚、産業主義のような当時関心を集めていた問題について議論に没頭していた。華やかに見えても、空疎感が漂い、現実世界における自己の存在から切り離された観念論に終始していた。Constanceは、彼らの饒舌で粉飾された独善的な考えを耳にするにつけ暗澹たる思いに駆られた。ラグビー邸はConstanceにとって、疎外と孤独の象徴的存在となっていた。

Constance は Clifford に精神的な魅力と興奮を感じたから結婚したのに、実際には、夫はただ成功のみを求めて観念と著作のなかに埋没していく男性喪失の男であった。この現実直面するにつれ、深い憤りを感じ始める。

そのような時、流行作家の Michaelis が Constance の前に現われる。Constance は彼の母性崇拝的な愛に「女」を圧殺され、我が身を任せる。彼は、経済的に豊かで流行の生活を送れるのが女性の真の幸福と考え、それを可能に出来る自分は価値ある男性であると言う。彼の自慢する輝かしい未来などは、既に経済的に満たされている Constance の心をなんら動かすものではなかった。それ故、彼との情事は、情欲を充たすだけに相互に相手を利用したという不快感が後に残り、精神的空洞を埋めることは出来なかった。Michaelis と出会ったことは、却って Constance を一層虚無的にする。

ラグビー邸の常連の中で毛色が変わったのは Tommy Dukes であった。ロレンスはこの世界に phallic consciousness⁽⁵⁾ を唱える自分の代弁者を紛れ込ませ、肉体軽視の思想に反論している。精神生活はもがれたりんごも同然で、腐るのは自然の道理であると Dukes は熱弁をふるう。

“Real knowledge comes out of the whole corpus of the consciousness, out of your belly and your penis as much as out of your brain and mind. The mind can only analyse and rationalise.... once you start the mental life, you pluck the apple. You’ve severed the connection between the apple and the tree: the organic connection. And if you’ve got nothing in your life *but* the mental life, then you yourself are a plucked apple, you’ve fallen off the tree.” (第 4 章)

Dukes は、肉体の存在を軽視した知性の偏重と極度の精神主義に現代の危機を察知しているが、認識の段階に留まっていて、彼の言う“a mental-lifer” (ibid.)と何ら変わりはない。彼自身もそのことを隠そうとはせず、“Oh, intellectually I believe in having a good heart, a chirpy penis, a lively intelligence, and the courage to say shit! in front of a lady.” (ibid.)⁽⁶⁾と認めている。彼の予言的言葉に即時の実効性はないが、この作品の哲学の中核をなすものである。それ故、ロレンスは Constance が Mellors と会ったとき、無意識に Dukes のことを思い出させている。Constance が Clifford から離れ、Mellors に接近するにつれて、Dukes の言葉が無視し得ぬ比重をもって彼女の意識の中で存在意義を増していく。

ロレンスは Constance と Mellors を会わせる前に、ラグビー邸の知的生活や Constance を捕らえた虚無感を丹念に描いている。人間の尊厳を否定する世界に生きその極限を提示することで、2 人の接触が決して感覚の刺激と満足のみ求める肉体の遊戯でないことを示しているのである。

ラグビー邸は人間的な触れ合いから生まれる暖かさを全く欠いた無機質の世界である。

Everything went on in pretty good order, strict cleanliness, and strict punctuality: even pretty strict honesty. And yet, to Connie, it was a methodical anarchy. No warmth of feeling united it organically. (第 2 章)

機械的な清潔さと秩序の中に、人間の息吹の絶えた不気味な空虚さが漂っている。この引用の後に続く *The house seemed as dreary as a disused street.* という短い言葉がラグビー邸の雰囲気や雄弁に語っている。この館の描写は Clifford 像を検討することで一段と深さと広がりを見せる。

ロレンスの最大の関心事は肉体の麻痺が人間性の麻痺と同調していることを半身不随の Clifford を通して描くことである。彼の麻痺は単に性機能の麻痺だけに限定されるものでなく、情緒、情念の機能停止にも及んでおり、彼自身の責任に帰される部分がある。

This lack of warmth, this lack of the simpler, warm, physical contact -was he not to blame for that? He was never really warm, but never. Kind, thoughtful, considerate, in a well-bred, cold sort of way! But never warm as a man can be warm to a woman.... (第7章)

Clifford は妻と人間的な、心の通った交流すら持とうとせず、観念的な接触に終始する。性に関して彼にとっては、*merely an accident, or an adjunct, one of the curious obsolete, organic process which persisted in its own clumsiness, but was not really necessary* (第1章) という無意味なものであった。結婚は精神の親密さであると考えているので、Clifford が正常な性的能力の持主であり続けたとしても、恐らく妻との関係は本質的には変わらなかったであろう。大陸で自由な生活をした Constance も、当初は *the love-making and connection were only a sort of primitive reversion.* (ibid.) と考える合理主義者であったので、夫の考えに抵抗はなかった。性の価値を認めない精神性のみで成り立つ親密さが、自然の一部としての人間の心を蝕む原因になることを体験する過程が、Constance の内面のドラマを構成していく。観念的思考の枠を出ない Clifford は、精神を伴わない肉体は官能の惑溺に陥り、肉体の裏付けのない精神は生の枯渇を惹き起すという人間の本性から目を背けていると言えよう。

Clifford の人間的暖かみを持たぬ非情さは、彼本来の人間性であるようである。或る早春の朝、夫婦で荘園を抜け森へ出かけたとき、荘園と森を守るために、他人の子供でも良いから、後嗣を生んで欲しいと、妻に当然の要求のように話す。現在の自分たちの生活を壊さないで、財産を継承する子供が手に入れば、行きずりの性の交合など重要な問題にはならないと考えている。性の結び付きが、単なる肉体の接触以上のことではないと、信じ切っている提案である。妻は必ずしも性を重大視していた訳ではないが、一種の機能として割り切っている夫の冷酷さにショックを受けた。性行為は肉体的行為であると同時に、重い感情のもつれを必然的に伴う精神の行為でもあることに理解が行かないのである。ここに Clifford の人間性の理解不足、人としての暖かみの欠如、精神的アンバランスなどが現れている。

嗣子問題について話した直後、Constance の人生に大きな影響を与える出逢いがあった。鉄砲を手にした男が茶色のスパニエル犬と共に突然現われた。最近 Clifford が雇い入れた森番 Oliver Mellors

で、濃い金髪に近い髪をし、紹介の後、澄みきった、恐れのない、冷やかな眼差しで Constance の目の中をひたと見つめた。彼女は彼の兵士らしい姿勢、教養人の英語と粗野な方言を交互に使う話し方を心に留めた。Clifford は彼に車椅子を押して、坂道を登るのを手伝うように指示した。少し急な上り坂で車椅子を押し上げるとき、男は口をあけて、やや息を切らしていた。生气に満ちていながら、ひ弱な、抑え付けられたようなところがあると見受けられた。Clifford よると、Mellors は坑夫の息子で、炭坑の鍛冶工をしていたが、入隊する前 2 年ほど、ここの森番をしたことがある。復員後、Clifford が再び森番に雇い入れた。結婚してはいるが、今は妻と別居し森番小屋に住んでいる。

車椅子の場面の後、Constance は Clifford からの伝言を伝えに森番小屋にやって来た。表の扉に応答がなかったので、裏手の扉に回ると、裸になって身体を洗っている Mellors の姿を偶然垣間見してしまう。白い裸の男の肉体、無駄のない正確な手の動き、自足した生命の孤独に深く心を動かされた。男が身体を洗っていた、というだけのことなのに、ショックを受けた⁽⁷⁾。奇妙な、幻のような経験であった。純潔に 1 人で生きている人間の、孤独感に圧倒された。

... a certain beauty of a pure creature. Not the stuff of beauty, not even the body of beauty, but a certain lambency, the warm, white flame of a single life revealing itself in contours that one might touch: a body!

Connie had received the shock of vision in her womb, and she knew it. It lay inside her. (第 6 章)

Constance はこの幻のショックを子宮に受け、その場から逃げるようにして去ったが、暫くして落ち着いた後、森番に伝言を告げに戻った。用向きを伝えて、Constance は邸に帰った。彼は現実の市民社会に存在根拠が殆どない孤独で非個人的な存在である。変幻自在なところがあり、一種の神秘性、超越性はこの作品が終るまで彼を離れない。

視覚の衝撃を子宮に受けた Constance は寝室に入ると、全て服を脱いで、大きな鏡に自分の裸身を映してみた。なだらかな曲線は熟さず、27 歳の肉体は起伏がなく、ぎすぎすしかかっている。肉体の無視と拒否の結果である。精神生活！突然 Constance は狂おしいまでの憤りを感じそれを憎んだ。

Unjust! Unjust! The sense of deep physical injustice burned through her very soul. (第 7 章)

次第に痩せて、身体的に弱ってきた Constance は、これを期に、非常に負担になっていた夫の世話を Mrs. Ivy Bolton に任せることにした。Mrs. Bolton は夫を 22 年前、炭坑事故で失い、今は教区看護婦を勤めている 47 歳の女であった。看護婦として、病気の坑夫たちに対しては自分をこの村の支配階級に属していると考えていると同時に、支配階級に対する憤りが胸の中でくすぶってもいた。心情的には従業員の味方であったが、支配階級の一員になることに憧れてもいた。しかし、人間的には、熱い血と温かい心を持ち、女としての肉体の本当の喜びを知っていた。様々な矛盾を内包している彼

女の複雑な心理は、非常に印象的な人間像となっている。Mrs. Bolton は Clifford に尽くすと共に、Constance にも気を配り、健康のために散歩などの外出を勧めた。Constance は春が訪れると共に、森へ出かけるようになった。

Mrs. Bolton はこの小説の脇役の中では重要な人物である。Clifford の身の回り一切を引き受けながら、彼女はテヴァーシヤル村とその周辺の炭坑町に関する細かな事実を細大洩らさず彼に話し始める。この結果、Clifford は次第に炭坑の経営に熱を入れるようになった。今まで、架空の物語の執筆に勤しんでいた Clifford は現実の産業界の支配者へと転身していく。内面的には相変わらず空虚な生活を送っていたが、外面的には産業界の有能な経営者として、颯爽として支配階級の仲間入りを果たした。しかし、Constance の気持ちは最早夫の許にはなく、森の中で過ごす時間は夫の活躍に比例して多くなっていく。

II Mellors との出会い

ある日、Constance は森からの帰り道で槌の音を聞き、その音を追って行くと、人目につかぬ小さな空き地と丸木作りの小屋に到った。雉子の雛を育てる場所で、Mellors が槌を使い、鳥屋を作っていた。Constance の休みたいという頼みで、小屋に招き入れ、彼は仕事を続けていたが、彼女は彼の孤独な姿をじっと見ていた。

And the same solitary aloneness she had seen in him naked, she now saw in him clothed: solitary, and intent, like an animal that works alone, but also brooding, like a soul that recoils away, away from all human contact. (第8章)

Mellors にとっては、ラグビー邸の令夫人が頻繁に森へやって来るのが迷惑なようであった。階級や金銭に煩わされる社会に嫌気がさし、森番となっている彼は、我執の強い妻とは別居中で、子供を母親に預け森の小屋に独りで住んでいる。この孤独な生活をただ1つ残された最後の自由と考えているので、辺りを散歩する Constance は彼の自由を侵す危険な侵入者に見えた。

Constance は森番小屋の鍵を Mellors から借り、頻繁に森を往き来するようになる。ヒヤシンス、桜草、すみれが群をなして咲き出し、榛の芽が、今にもしたり落ちる雨滴のように開きかかり、まさに新しい生命の息吹きが噴き出しているのを楽しんだ。また、Mellors が飼育している雉子の雛が巣籠もって卵を抱き、雛を孵す過程に強い興味を示した。何れも新しい生命の再生を象徴する自然の現象で、彼女は殊に雛に見られる女性性、母性に感動を覚え、自らは独りぼっちで、十分に女の役目を果せない、不幸な存在であるという思いに苛まれた。その悲しみを癒すために Constance は雉子の雛を見に足繁く鳥小屋を訪れる。ある日、孵ったばかりの生命力に満ちた雛に魅了され、恍惚となる。

Connie crouched to watch in a sort of ecstasy. Life! life! Pure, sparky, fearless new life! New life! So tiny, and so utterly without fear! (第 10 章)

新生の雛は、ラグビー邸の冷ややかな環境に凍り付いてしまっていた彼女の心に、より一層切実に訴える。このように、強い感動を受けたので、その後も雛をまた見たいという気持ちを抑え切れずに、ある夕方、ラグビー邸の女主人の仕事もそこそこに森へ急いだ。孵化した雛は 36 羽になっていた。雛が *the only things in the world that warmed her heart (ibid.)* と思われるほど、彼女は孤独の極みに立っていた。雉子の飼育場の辺りには新生を告げるかのように、春の草花が咲きそめている。このあたりは全編中、最も優しい場面の 1 つである。孵ったばかりの小さな身体に宿る生命の炎は彼女に点火し、彼女の奥深く隠されていた埋み火を燃え立たせる。この雛の生命は森の樹木や Mellors の肉体に彼女が感受した、生き生きとした生命と同質のものである。感動して見ている Constance に Mellors は雛を手渡す。

“There!” he said, holding out his hand to her.

She took the little drab thing between her hands, and there it stood, on its impossible little stalks of legs, its atom of balancing life trembling through its almost weightless feet into Connie’s hands. But it lifted its handsome, clean-shaped little head boldly, and looked sharply round, and gave a little ‘peep!’

“So adorable! So cheeky!” she said softly.

The keeper, squatting beside her, was also watching with an amused face the bold little bird in her hands. Suddenly he saw a tear fall on to her wrist. (ibid.)

Mellors に手渡された雛の脚を通して伝わってくる生命の震えに、Constance は無用の存在となった母性の虚しさを思い、悲しみの涙を流した。Mellors は彼女の涙を見ると、彼女の側を離れた。永遠に消えてくれればいいと願っていた昔の炎が腰の辺りに突然燃え上がって拵がるのを感じたからである。その炎を鎮めようとしたが、彼の意志とは別に、跳ね、跳ね降りて、膝のあたりで輪になって燃えた。初めて Mellors が Constance に「女」を感じた場面である。

Mellors は向き直って Constance を見ると、跪いて盲目の人のようにゆっくりと両手を差し伸べながら、雛を親鳥の許へ返してやろうとしていた。その姿には耐え難い孤独な影があり、Constance への同情が彼の身体の中で燃えて、片手を差し伸べた。Her face was averted, and she was crying blindly, in all the anguish of her generation’s forlornness. (ibid.) もう女と関わりを持つまいと決意したのに、静かに座っている女性の孤独な姿に彼の決意はもろくも崩れてしまう。

Mellors は訳も分からず泣き続ける Constance の肩に手を置き、柔らかく、優しく、背中中の曲線に沿って、盲目的ないたわるような動作で、しゃがんでいる腰の曲線のところまでなでていった。小屋に

共に入ると、暗闇の中で Constance は毛布の上に横になった。一種の眠り、夢の中に横たわっている彼女は彼と結ばれた。2人は現実意識、精神生活を支えている意識をも完全に捨て去り、何にも邪魔されることなしに結ばれたのである。

それに続く情交の場面の描写は簡潔で、最低限のことが乾いた文体で表現されているに過ぎない。性の感覚の目眩く描写からはほど遠く、抽象的、心理的なものとなっている。

Then with a quiver of exquisite pleasure he touched her warm soft body, and touched her navel for a moment in a kiss. And he had to come in to her at once, to enter the peace on earth of her soft, quiescent body. It was the moment of pure peace for him, the entry into the body of the woman.

She lay still, in a kind of sleep, always in a kind of sleep. The activity, the orgasm, was his, all his: she could strive for herself no more. Even the tightness of his arms round her, even the intense movement of his body, and the springing of his seed in her, was a kind of sleep, from which she did not begin to rouse till he had finished and lay softly panting against her breast. (ibid.)

ここでは、Constance はあくまでも受動的で、積極的な性の喜びを経験することもなく終ってしまう。しかし、これまでの男性との交渉の後で抱いたささくれだった気持ちの不安定さはない。恐らく、a kind of sleep の中であって、性的感覚とは違った充足を得て、それが大きな慰めと救いになったと思われる。この行為には、自分の欲望にのみ執着し、無理にも満足を得ようとする食欲が見られない。Michaelis との時と比べれば大きな違いである。無意識の最深部から人間を動かしている本源の力が作用しているようであった。雛鳥を見て感じた母性の無償の愛情と、傷付き易い生きものに対する Mellors の優しい心遣いなどが、彼女の中で共鳴し合い、彼女の剥き出しになって、傷付いた神経を癒したのであった。Mellors との触れ合いから感じたものは人間個人に対する優しさである。

Constance がこれまで接した男性は、社会的存在を越えた、彼女の内なる女性そのもの (the female in her) (ibid.) に対しては冷たく残酷であった。

Men were awfully kind to Constance Reid or to Lady Chatterley: but not to her womb they weren't kind. (ibid.)

Mellors にとっては Constance Reid も Lady Chatterley も重要でなく、彼は Constance をただ女性として腰や胸をひたすら優しく愛撫してくれた初めての男性であった。彼女は彼の中に、her womb に優しく接してくれる男性を発見した。精神生活と自意識に疲れた現代の女性である Constance は自我を離れた安らぎや癒しとしての性を体験したのであった。2人の出会いは Constance ばかりでなく、Mellors にとっても生の転換を意味した。彼女は彼との新たな関係に満足のいくものを見付けたが、彼は社会

の怖さを知っているだけに、もっと複雑な気持ちを抱かざるを得なかった。ロレンスは、Constance を見送る Mellors の姿を次のように解説している。

Almost with bitterness he watched her go. She had connected him up again, when he had wanted to be alone. She had cost him that bitter privacy of a man who at last wants only to be alone. (ibid.)

Mellors には不倫という罪の意識はいささかもない。始まったのは、恋愛遊戯でも情事でもなく、人生であったからである。Constance に後悔しているかと訊かれたとき、彼はもう終わっていた人生を再び始めてしまったと答えている。

Constance に会う前に、Mellors は 3 人の女性と知り合ったが、始めの 2 人は極度に性を忌避する女性であった。3 番目の Bertha Coutts は今別居中の妻で、意志を押し通す、自我の強い女であると、彼は後に語っている。

“She sort of kept her will ready against me always, always: her ghastly female will: her freedom! A woman’s ghastly freedom, that ends in the most beastly bullying! Oh, she always kept her freedom against me, like vitriol in my face.”(第 18 章)

Mellors はこのような専制的な自我を押し付ける女から逃れるためにラグビーの森へやって来た。the core of my (his) life (第 14 章)になるような女性に出会いたかったが、実際に出会う女達はその反対のタイプばかりで、すっかり女性不信に陥っていた。しかし、心のどこかでは、being warm-hearted in love (ibid.)を求めている。Mellors は彼の逃亡の聖域である森に入ってきた Constance にも初めの内は大いに警戒していた。

He dreaded her will, her female will, and her modern, female insistency. And above all, he dreaded her cool, upper-class impudence of having her own way. (第 8 章)

しかし、Mellors は Constance のラグビー邸での生活について認識を深めるにつれて、自分自身も Bertha Coutts の self-willed female (第 8 章)に傷付き苦しんでいるので、Clifford の self-willed male に苦しむ Constance の心をよく理解するようになる。それは同じ苦しみを受けている者が示す相手の痛みへの理解であった。

Mellors は男女の関係を一時的な「快樂」追求の手段と考えるのではなく、自分の生命を支える「生活」として捉えている。性の喜びを共にすることは、相手の全体を引き受けることである。森の中で人知れず、2 人だけの愛の世界を築くのは不可能で、森の外に出て広く非情な現代文明社会と関わる

のを避けることは出来ない。それ故、最初にすべきことは、Constance と Clifford の夫婦関係を可能な限り円満に解消することであった。順応しないものは容赦なく破壊してやろうと待ちかまえている社会から、生活苦など経験したことのない彼女を護ることが自分の責任であると Mellors は考えたのである。

一方、Constance は翌日午後、2 度目の肉体的交わりを求めて森の小屋に Mellors を訪ねて行ったとき、自分の身体が新しい感覚を得たのを自覚し、木々の力がその感覚に強い作用を及ぼしていることを感じる。

It was a grey, still afternoon, with the dark-green dog's-mercury spreading under the hazel copse, and all the trees making a silent effort to open their buds. Today she could almost feel it in her own body, the huge heave of the sap in the massive trees, upwards, up, up to the bud-tips, there to push into little flamey oak-leaves, bronze as blood. It was like a tide running turgid upward, and spreading on the sky. (第 10 章)

生命の真随を感得させる森を舞台にした Constance と Mellors との結び付きは自然の生命と強く同調している。ここにおける樹木の描写は実に肉感的である。自分の体の中に樹液の脈動が強く感じられる。この力に漲る屹立する樹木は男根を連想させるのに十分な暗示力を持っている。彼女は Mellors との交わりで森の生命力とも自分の生命力が交感したことを実感する。Constance と Mellors との性的交わりは樹木や自然との交流も意味している。彼らの性は森に生きる一切の生きものを含めて、それらの生の営為の一部になるように描かれている。

この時には、Mellors に会えなかった Constance は時間を空けて、彼を森の中で待ち、夕刻にやっと会うことが出来た。彼は 2 人の仲が人に知られることになるのに警戒し、恐れていたのである。Clifford との生活を捨てる気になった Constance にはもう怖いものはなかった。Under her frail petticoat she was naked. (ibid.) というように、彼女の積極的な態度に押されて、2 人は再び関係を持つ。彼女は Mellors との性行為の中に、自分自身の救いや心の平和と同時に肉体的快樂をも強く望んでいた。しかし、彼女の気持ちは未だその域には達成していなかった。

And when he came in to her, with an intensification of relief and consummation that was pure peace to him, still she was waiting. She felt herself a little left out.... She lay still, feeling his motion within her, his deep-sunk intentness, the sudden quiver of him at the springing of his seed, then the slow subsiding thrust. The thrust of the buttocks, surely it was a little ridiculous!... Surely the man was intensely ridiculous in this posture and this act! (ibid.)

Constance はこの時点で、無意識に彼を求め行動を起こしているが、強い能動的意志を伴った行動で

はない。本能的な動きであるので、彼の行為は *ridiculous* と見える程、彼女の気持ちとかけ離れた姿として捉えられている。このように、最初の 2 回の交わりは未だ成熟した段階に到達していない。一方、Mellors はこの 2 度目の交歓の時に、初めて彼女との会話で、意図的に標準語ではなく、方言を使っている。方言、即ち、誰もが話す、個性を伝えることの少ない言葉ではなく、個人や地域の直接的な雰囲気を与え、話す人の体臭をも感じさせる言葉を用いることで、彼は自分自身の世界を強調し 2 人の関係の独自性を認識させようとする。彼の方言の使用は後になるとやや度が過ぎ、不自然な場面も出てくるが、この段階では抑制を以て用いられており、全体の流れを損なうものとはなっていない。

Ⅲ 生命との交歓

次の 2 度の交歓で Constance は初めて激しい感覚の快楽を伴う情熱的な性体験する。自分を抑えて、彼と会うのを控えようとしたが、4 日目になるとひどく不安になり、落ち着きを失ってきた。そこで、平静を保とうと散歩に出た。その帰り道で思いがけず Mellors に会い、強引に森の中に連れ込まれて関係を持った。Constance はこの時始めて強烈な感覚に襲われて叫び声を上げる。2 人は同時にオルガスムに達した。Constance は女性としての自我、*her hard bright female power*(*ibid.*)を捨てて、*so fathomless, so soft, so deep and so unknown (adoration) (ibid.)*の中に沈んでゆきたいと思う。別れて帰ったその夜、入浴しなかった。彼の肉体が自分に触れた感じが、いとおしく、ある意味で神聖なものと思えたからである。

先の Constance が雛の新しい生命力に感動して涙を流す場面は印象的なものであるが、彼女の宇宙との合一をイメージさせる場面は他にも到る所にちりばめられている。この晩、Constance は充実した生命力を感じ始め、自分自身が森であるかのように感じる。

She was like a forest, like the dark interlacing of the oak wood, humming inaudibly with myriad unfolding buds. Meanwhile the birds of desire were asleep in the vast interlaced intricacy of her body. (ibid.)

徐々に、2 人の関係が外部の者の知るところになりつつあるとき、4 回目の関係を持つ。この場面は全編の 1 つのクライマックスとなる有名な個所であるが、その始まりはスムーズなものではない。Constance は Clifford が後継ぎを欲しがっており、他の男と情事をもって子供を生んでくれと暗に頼んだことを話すと、Mellors は当然のことながら腹を立てる。彼女には又もや、彼の性行為が *ridiculous* とも *farcical* とも思われ、皮肉な感情が湧いてくる。心が寄り添わず、不愉快な気持ちを引きずった、その後のセックスはうまく行かなかった。

And this time the sharp ecstasy of her own passion did not overcome her, she lay with her hands inert on his striving body and, do what she might, her spirit seemed to look on from the top of her head, and the butting of

his haunches seemed ridiculous to her, and the sort of anxiety of his penis to come to its little evacuating crisis seemed farcical. Yes, this was love, this ridiculous bouncing of the buttocks, and the wilting of the poor, insignificant, moist little penis. This was the divine love! After all, the moderns were right when they felt contempt for the performance: for it was a performance.(第 12 章)

この不首尾の後、2人は心を寄り合わせ、Constanceは自分のこだわりを捨てて、彼に抱かれると、不思議な平穏の中に溶け込むことが出来た。今度は the dark thrust of peace and a ponderous, primordial tenderness, such as made the world in the beginning (ibid.)を味わう。ロレンスはここで性体験を1つの超越的体験、その前で狭い自我意識が溶け去るような、個人を超えるものに触れる体験としている。*Lady Chatterley's Lover*は卒直な性描写で社会を騒がせた作品であるが、この作品の性描写全てがあからさまなというのではない。肉体の形状や動き、感覚の具体性の描写は極力抑えられている。故意に劣情を刺激するものは感じられない。Constanceは性行為によって自然と交流し、自分の生命の原形質に触れ、自らが海と化して至高のエクスタシーに達し、生まれ変わって1人の女になったと感じる。

And it seemed she was like the sea, nothing but dark waves rising and heaving, heaving with a great swell, so that slowly her whole darkness was in motion, and she was ocean rolling its dark, dumb mass. Oh, and far down inside her the deeps parted and rolled asunder, in long, far-travelling billows, and ever, at the quick of her, the depths parted and rolled asunder, from the centre of soft plunging, as the plunger went deeper and deeper, touching lower, and she was deeper and deeper and deeper disclosed, and heavier the billows of her rolled away to some shore, uncovering her, and closer and closer plunged the palpable unknown, and further and further rolled the waves of herself away from herself, leaving her, till suddenly, in a soft, shuddering convulsion, the quick of all her plasm was touched, she knew herself touched, the consummation was upon her, and she was gone. She was gone, she was not, and she was born: a woman. (ibid.)

この場面の描写には、直接に性を示す語は使われていない。一般的な pornography におけるような微に入り細を穿った臨床的な性描写などはない。官能性はあるが、猥褻性はないと言えよう⁽⁸⁾。性の頂点に上り詰めていく女の生理と心理のリズムを、反復する波のうねりに転化し、深い海のイメージに託して、肉体と精神の合一を見事に描写している。

IV Constance の再生

そして、新しい生命として1人の無名の女が生まれたのである。ここでは愛の行為はただ単なる一行為ではなく、生命の行為である。Mellorsとの心と肉体の触れあいによって、Cliffordの下で抑えられ、窒息寸前であった「生命力」は急速に回復し、本来の人間性を取り戻した。

5 回目の出会いの場面は Mellors の過去の女性体験の告白となっている。彼の女性不信の最大の原因である Bertha Coutts に話しが及ぶと、こんなことを言うー

“... she'd sort of tear at me down there, as if it was a beak tearing at me. By God, you think a woman's soft down there, like a fig. But I tell you the old rampers have beaks between their legs, and they tear at you with it till you're sick. Self! self! self! all self! tearing and shouting!” (第 14 章)

強い女性不信の気持ちを表す Mellors を、Constance はあなたは私を含めてどの女も信じていないと非難する。それに対して、Mellors は

“I believe in being warm-hearted. I believe especially in being warm-hearted in love, in fucking with a warm heart. I believe if men could fuck with warm hearts, and the women take it warm-heartedly, everything would come all right.”(ibid.)

と反論し、君の方が自分の self-importance に取り憑かれている、性もその心を満足させるためだけにあると言いつ返す。言い争いが始まると、Constance は気を失いそうになる。ショックを受けた Mellors は争うのは止めようと言って彼女を抱き、仲直りのための交歓をする。彼の言う温かい心で交わりをした 2 人は安らぎを得ることが出来た。いかなるエクスタシーを経験した後でも、男女の自我は一瞬の調和はあっても、対立や葛藤はまた戻って来る。ロレンスは性体験によって人間は生まれ変わり、より良い世界に昇華すると説くが、そのような体験は純粹ではあっても長続きはせず、また元の状態に戻るという現実是否定出来ない。

翌朝和やかな気持ちで目覚めた 2 人は裸になって互いの身体を確認し合い、もう 1 度交わりを持つ。この描写は性の満足を通じて、心身共に強く結び付き合ったことの確認と同時に、互いに執着心が強くなり、今後の苦難を想い、離れて暮らす不安や辛さを示す場面でもある。

Constance は、夏に姉とヴェニスへ旅行に出かけ、帰って来たとき、夫と別れるという決意を Mellors に告げるために雷雨の中を森の小屋を訪れる。すると、Mellors は現代の機械文明を呪い、もっと簡素に生き、人間らしい生活に戻るべきだと主張する。Mellors は話が進むにつれて次第に多弁になり、始めの頃は寡黙で神秘的なであったが、ロレンスの思想の代弁者、予言者に変化している。Constance は彼の雄弁の側で彼の陰毛に花を挿している。ロレンスは自身の思想の露骨な表出を和らげるために、滑稽さを演出し、Mellors の意見を相対化しようとしている。この社会批判の場面から一転して、Constance は裸で雨の中に飛び出して踊り狂い、後を追った Mellors は豪雨のなかで動物のように彼女と交わる。現代社会批判の場面から、現実の生活、それも極めて個人的な性的結合の場面への転換は、ロレンスが並みのポルノ作家と同様に、性的な場面に変化を付けようとしたのか、2 人の関係が自然

の中で更に強固になったことを示そうとしたのか、いずれにしても読者にとって意表を突くものである。性的な場面に新たな趣を与えるということについては、この場面は各方面で数多く言及されているので、それなりに成果が上がっていると言えよう。一方、雨は、*The Rainbow* の虹と同様に天地を結ぶ役割を果たしていると考えられる。森の雨降る中で結ばれるというのは、2人の関係が自然と融合出来た象徴となっている。

Constanceはヴェニスに出発する前夜、姉のHildaとMellorsの住まいを訪れる。Hildaは早々にMellorsと喧嘩してしまい、怒って1人で帰って行く。そのため、2人はa night of sensual passion(第16章)を送ることが出来た。それはtendernessよりもっと鋭く怖い感覚であり、the deepest, oldest shames, in the most secret places (ibid.)の心を焼き尽くすような体験であった。anal intercourseである。今まで見て来たように、ロレンスはこの2人における性の描写に、段階的に、次第に奥深い性の神秘を導入してゆく一種のinitiationとしての役割を与えている。禁忌を侵すこの場面はその究極の姿である。Constanceはこの行為でthe real bedrock of her nature(ibid.)に達したと思い、That was how it was! That was life! (ibid.)と確信する。恥と恐怖を脱ぎ捨てて、shameless(ibid.)になった彼女は生命が何たるかを知った。ロレンスはこの場面を当然曖昧なベールに包んでいる。検閲を警戒しつつ、本質的には禁忌の侵犯とその神秘性を同時に描写しようとしたからである。一度禁忌は犯されてしまえば、それは禁忌でなくなり、以後それを犯す時の驚きも畏れも小さくなり、消えてしまう。

ロレンスにとって、この驚異と畏怖は絶対に必要であった。そのためにもanal intercourseは侵犯されながらも、禁忌であり続けなければならなかった。現代的な観点とすれば、「自己の真の岩盤」とか「これが生命だったのだ」とかいう言葉は大げさである。一過性の1つ局面を余りにも過大評価している。

Constanceのヴェニスへの旅行中、テヴァーシャルの村では、長い間別居をしていたBertha CouttsがMellorsの許に戻った。彼と激しい争いを引き起こしたので、Constanceと彼の情事が驚くべきスキャンダルとして村全体に知れ渡ってしまい、彼はラグビー邸を去らねばならなくなった。

この事態を受けて、Constanceは帰国し、先ずMellorsと会い、その後のことを話し合うことにした。ラグビー邸をクビになってロンドンのわびしい下宿にいる彼を訪ねた。Constanceは妊娠しており、Cliffordと別れて彼と結婚することを望んでいる。彼は躊躇した後で、父親となることを引き受ける決意をする。彼女の腹にキスをし、静かな性の交わりをし、“I stand for the touch of bodily awareness between human beings, and the touch of tenderness.”(第18章)と言う。

V 離別と出発

Constanceはありのままの事実を父や姉に打ち明ける。Mellorsを介して森との交流を果たした彼女が真に生命のある人間として自分に付与された女性の属性を大切に生きていくことは、ラグビー邸でCliffordの妻に留まっていたは不可能である。文明社会の抽象的で観念的な生き方を代表するClifford

と共に生きていくことは、最早難しかった。そして、事態を收拾するために、Clifford に向かって離婚を求める手紙を書いて送る。この手紙が最終の第 19 章の冒頭となっている。その手紙に接したときの態度はいかにも彼らしかった。

Clifford was not *inwardly* surprised to get this letter. Inwardly, he had known for a long time she was leaving him. But he had absolutely refused any outward admission of it. Therefore, outwardly, it came as the most terrible blow and shock to him. He had kept the surface of his confidence in her quite serene. (第 19 章)

全体のエピローグは 1 人農場に住みこんで仕事を習っている Mellors が Constance に宛てた、抒情的な手紙が結びである。穏やかで抑制のきいた文章で綴られている。現代文明に対する抗議や、厳しい批判⁽⁹⁾を含んでいるにしても、彼の未来に向けての決意は明確に示されている。そして、自分の理想とする時代が来るとは思えないが、どんなに悪い時代でも、自分たちの間の小さな焰を消すことは出来ないだろう、と言う。

“So I love chastity now, because it is the peace that comes of fucking. I love being chaste now. I love it as snowdrops love the snow. I love this chastity, which is the pause of peace of our fucking, between us now like a snowdrop of forked white fire.”(ibid.)

Mellors は早春のスノードロップの花を見ながら、やがて再びめぐって来る新たな季節に思いを馳せる。性が永遠に繰り返しながら、新しい驚異であり続け、巡る季節の循環と合体するのを祈って。

VI 結び

先に引用した、Mellors が Constance の妊娠した子供に責任を持つことを受け容れたときの言葉、“I stand for the touch of bodily awareness between human beings ...and the touch of tenderness.”こそ、作者ロレンスがこの作品で人生の最後に主張したい言葉であった。

ロレンスは Mellors に優しさの中にある真の男性性を付与している。Mellors が真の男性であるのは、ロレンスの言う *phallus* によって男性と女性の生命に満ちた関係を作り出す力があるということである。*phallus* による力とは、相手を押さえ付ける力ではなく、優しさを以て他者と自己の平衡を保つ思いやりである。死の宣告を受け、自分の命に先が見えた作者は、これまでのように、男女の均衡した関係を構築するには、力や理想に依ってではなく、*the touch of bodily awareness* や *the touch of tenderness* を拠り所にすべきであるという境地に到った。即ち、生き生きとした生命力に満ちた関係を喪失した冷酷な現代社会において、人間を救うのは「優しい性愛」であり、また、優しさに裏打ちされた性による関係こそが人間と人間を真に結び付ける交わりであると主張しているのである。

注

- (1) Frieda Lawrence: “*NOT I, BUT THE WIND...*”: London: William Heinemann, 1935, pp. 142-143
医者から“Mr. Lawrence has tuberculosis.”と言われ、“He has T. B. in the third degree. A year or two at the most.”と宣告された。
- (2) D. H. Lawrence: *Lady Chatterley's Lover*, The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence, ed. Michael Squires: Cambridge: Cambridge University Press, 1993, Hardcover を使用。引用は本文中に章数を示す。
- (3) Julian Moynahan: *The Deed of Life*: Princeton: Princeton University Press, 1966, p. 140 を参照。
この2元論について言及する研究者は多い。Moynahan も次のように述べている。
Lady Chatterley's Lover dramatizes two opposed orientations toward life, two distinct modes of human awareness; the one abstract, cerebral, and unvital; the other concrete, physical, and organic.
- (4) Graham Hough: *The Dark Sun*: London: Gerald Duckworth: 1956, p. 151
下半身麻痺の夫との精神的生活に心身共に疲れ、森番と結ばれて人間らしい生活を得るという筋は vulgarly conventional に見えると、指摘。
- (5) D. H. Lawrence: *Sex, Literature and Censorship*: London: William Heinemann, 1955, p. 258
For the phallus is only the great old symbol of godly vitality in a man, and of immediate contact.とロレンスは述べている。即ち、phallic consciousness とは、快楽的、享乐的、精神的な性ではなく、宗教的趣を秘めた性の表象であると言えよう。
- (6) Moynahan, op. cit., p. 156
Dukes in his own words is a “mental-lifer” who holds the right ideas but cannot act upon them. He is the Hamlet...of *Lady Chatterley's Lover*.と述べ、彼は考えは表明するが、行動が伴わない男であることを指摘。
- (7) H. M. Daleski: *The Forked Flame*: London: Faber and Faber: 1965, p. 282
Mellors' body bears the same relation to the wood as Clifford's to Wragby.などと言い、森番の肉体の描写と森の木々の描写との類似性を指摘。
- (8) Mark Spilka: *The Love Ethic of D. H. Lawrence*: London: Indiana University Press: 1955, pp. 187-188
本作品の愛についての叙述が a vivid and dramatic sense of Connie's transformation を我々に示し、a fuller, finer, wiser vision of our physical existence の門戸を開いた点で、a basic triumph in artistic integration を表すものであると、述べている。
- (9) Alastair Niven: *D. H. Lawrence The Novels*: London: Cambridge University Press, 1978, p. 175
For that is the character of Lawrence's vision now: a will to see some alternative to the impotent mechanism of modern living. と述べ、作者は観念的な思考に陥ってはいるが、現代の非人間的な産業文明を変える糸口を見付けようという意志を最後まで示していると指摘。